

平成 30 年度 第 3 回 情報共有基盤 技術検討ワーキンググループ
議事要旨

日時：2019 年 2 月 13 日（水）16：00～18：00

場所：経済産業省 別館 2 階 225 各省庁共用会議室

出席者：

【主査】

武田 英明 主査

【委員（50 音順）】

小田 利彦 委員

加藤 文彦 委員

古崎 晃司 委員

早矢仕 晃章 委員

【オブザーバー】

川口 睦裕

大槻 文彦

【事務局】

酒井 一樹(経済産業省)

田代 秀一(IPA)

日向 英俊(IPA)

議題：

- (1)事業の実施状況
- (2)来年度以降に注力すべきポイント
- (3)推進委員会への報告事項検討

配布資料：

- (1)【資料 0】議事次第
- (2)【資料 0-1】委員名簿
- (3)【資料 0-2】席次表
- (4)【資料 1】技術検討 WG（第三回）検討資料
- (5)【参考資料 1】IMI 普及戦略ロードマップ

議事概要：

1. 事業の実施状況

資料 1（～P.5 まで）を元に事業実施状況の全体像の報告が行われた。また P.10 以降に個別のタスクフォース（以下、TF）の活動状況の詳細を記載している旨を説明された。技術ポリシーTF、国際標準化TF、評価手法検討TFの主査より、各TFについての活動状況及び課題についての説明が行われた。

<主なご意見>

【技術ポリシーTF】

- IMI の技術的な問題は全てここで扱うという箱になってしまった。
- 当初の設置の目的以外でも技術的な問題があれば全てここに持ち込まれるという運営だった。
- 法人インフォ TF からの要望で、「コア語彙の改定」、「語彙記法の改定」、「DMD 仕様改定」、「マッピング仕様改定」に対応した。
- ドメイン語彙をどうするか、ドメイン語彙を作るという事に関し、技術的な課題のネームスペースをどうするか、どういう名前付けをするのか等を決めた。
- ドメイン語彙管理において、それを承認する為の手順や組織のあり方など今後の課題。
- 普及の為には、現状まだ不足していると思われるドキュメンテーションを今後整備していく必要がある。

【国際標準化TF】

- データモデルや語彙等の IMI の根幹を記述する為の語彙の記法を、IMI の中で独自で作っていて、その記法の部分を取り上げて国際標準化の検討するのがこのTFの課題。
- ISO/IEC JTC1/SC32/WG2 小委員会に持って行き、感触を得ているところだが、割とこういうもの自体は必要だという事で受け入れられているようだ。
- 今は標準化として ISO をターゲットとしているが、他にも W3C やその他の標準化団体に持って行くという可能性もあり、どこで標準化を行うかはまだ未定。

- この語彙記法自体、昨年は日本語で作っていたが、国際標準化の為、英語化した。また名称は、「Notation for Vocabulary definition Metamodel」とした。

【評価手法検討 TF】

- データの相互運用性を評価する為の手法についての検討を進めてきた。想定する成果物としては、データ評価に必要な評価軸に関する報告書が主なところ。主な検討対象としては、IMAPS と SIMAPS。
- 最近 DTA にてデータの品質を評価するような指標づくりが進んでいるという事で、それらの情報を提供頂きながら、さらにその民間データやトレーサビリティという視点を入れつつデータの評価手法を考えていった。
- ヨーロッパで検討が進んでいる SIMAPS にもこちらの検討状況を発信しており、来年度以降の協業の可能性について議論していきたいと思っている。
- 今まではデータを書くという事に集中していたが、データを使うという事からデータの品質の問題を抜きには出来ず、これからは絶対に避けては通れないものだ。
- XBRL だとアメリカでは、証券取引委員会に全ての米国上場企業が XBRL の語彙を使っていてデータを提出しているが、そのチェックロジック、チェック基準は何段階もあり厳格に管理された仕組みがもう 10 年弱運用されている。

2. 来年度以降に注力すべきポイント

今期何を実施し、その結果、今後何に注力すべきなのかについての議論が行われた。

<主なご意見>

- 評価についてはまだ道半ばであり、特にスキーマ自身の品質をどう担保するかというのは、我々実はあまり深く考えていなかった点であり、これは IMI が使われる為には、今後検討する必要があると思う。
- 法人ドメイン語彙というのは新しく出来るが、実装は少しタイミングがずれており、来年度にそこに合わせていくという事を検討する。
- リファレンスモデル的には実際に具体的に色々行われている世界とどう接続するのか？どう位置づけるのか？既存の様々な体系とどうやって共存するのか？互いにどううまくリンクするのか？等を次への課題として提示したい。
- 技術検討をおこなってみて分かった事は、色々な組織やステークホルダーと一緒に考えていく場を作らなければならないと思った。IMI 検討体制が例えば IMI 協会(仮)のような組織を作り、横に繋ぐような仕組みを作るなど。
- セミナーを開催した時に、パートナーから「ドキュメントが足りない、分からない」等の意見を頂いた。ドキュメンテーションを整備するというのは来期おこなう ToDo として残っている。
- オープンソースの開発はどんどんしたいが、IMI サービスが割と重厚長大にな

ってきており、現状、全部 IMI 検討体制が決めている感もあり、そこがあまりオープンでないという印象を与えていると思う。

- 技術者でも正直、IMI 語彙記法自体をスクラッチで作るのは勘弁してという状況。逆にライブラリが整備され、そのノウハウでどんどん使っていく方が語彙レベルのプロに火をつけるより良いと思う。
- ベンダーの人に実装してもらおうと思った時に、出来れば各言語でのライブラリを整備し、それを組み込んで使ってもらうようになった方が、組み込むのもスムーズにいく筈。
- 記法の標準化にもオープン化はいいアプローチだと思う。また、記法で何をするかというのも色々出てきそう。コア語彙を書くとか応用語彙を書くだけではなく、何かと何かを結びつける為の方法が書けるかしかない。
- 単に技術的に興味があるという人は自由に使ってもらった方がいい。ある意味ここから先は関知しない、自由にやっていい、という領域と、IMI 協会(仮)みたいなところが、我々の中に入ってくれば、この中であなたの語彙を位置付けます、一緒になって改善しますとか、分けて考えた方が良い。
- 全体の方向性、それこそロードマップかもしれないが、そういうものをしっかりと考えた上で、進める事が必要だ。IMI は、究極的には意味レベルでの相互運用性を向上させるという事だと思っている。そこで、その目的を実現するために、IMI として何を実行すべきなのか。それにはやはり全体像が欲しいが、今それが無いのが問題だ。
- まとめると、一つのアプローチは組織的アプローチ。もう一つがオープンなアプローチ。その両方が出来るような体制を作る事が、これからやるべき事かと思う。関わる人の問題意識によって、取り組み方が違う。だから、その両方が出来るような体制を作りたい。これはすごく重要だ。

3. 推進委員会への報告事項検討

今回の議論を踏まえ実施した結果何をすべきか。この WG でどんな報告を上げるべきかという点について議論が行われた。

<主なご意見>

- IMI のコアをしっかりと確立する (IMI 語彙記法、コア語彙、語彙の作り方) という事が必要ではないか。特に語彙記法は標準化にも繋がる話で、ここはしっかりと確立する必要がある。これは IMI そのものの位置付けとしての提言。
- 展開の方法について、IMI 展開戦略のようなものを提言したい。その一つは、組織化というか組織的連携のコアとなるものを作るべきでは無いかというのが一点と、もう一点が、オープン化、オープンコミュニティが使えるような形に持っていく事。この両輪で行くべきでは無いか。

- 技術的残課題を継続すべきでは無いか。例えば、異なる組織からの語彙と連携・ミックスする方法等、まだそういった技術的課題が残っていて、それは継続すべきだと提言したい。

4. 合意事項

(ア) 推進委員会への報告事項

- ① IMI の核となるコアの部分をしっかりと確立する。
- ② IMI の展開戦略という事で組織連携とオープン化を両輪で実施していく。
- ③ 技術的な課題を継続検討する。

5. その他

(ア) IPA 事務局が推進委員会への報告事項の素案を作成し展開する。